

移民第二世代は学校経験をどう語るか（2）

—中国系ニューカマーの事例—

職業能力開発総合大学校 坪田光平

1. 目的と課題

本報告の目的は、中国系ニューカマー第二世代における学校経験のあり様を、義務教育段階における教師・生徒間関係にまつわる「語り」に注目して明らかにし、学業達成との関連を考察することである。

国勢調査のオーダーメイド分析を通じ、これまで中国系ニューカマー集団に関しては在日歴5年以上に統制した場合、日本人よりも高い大学通学率を示す点に特徴が認められてきた（大曲ほか 2011）。一方、これまで中国系ニューカマーの学校経験を扱った研究では、出身国と日本の学校文化の相違や言語獲得、親の出身階層の影響をはじめ、かれらの学校適応には様々な困難要因が指摘されてきた（趙 2010; 鍛冶 2000; 李・佐野 2011）。しかし日本の大学進学を達成する集団理解の一方、中国系ニューカマー第二世代がどのようにしてそうした困難要因を克服していったのかは明らかではない。

そこで本報告では、青年期・壮年期を迎えた中国系ニューカマー第二世代の学校経験とその克服の語り

- に注目しながら、かれらの学業達成の過程を明らかにする。具体的な研究課題は以下の通りである。
- ①中国系ニューカマー第二世代の若者たちは、義務教育段階でどのような困難を経験したのか。
 - ②学校経験の困難は、どのように克服されたのか／されなかったのか。そのことが第二世代の学業達成に与えた影響に注目しながら明らかにする。

2. 対象と方法

中国にルーツをもつ18歳から30代前半の若者40数名をスノーボール形式で集め、2時間～3時間程度かけて半構造化インタビューを行った。対象者の親世代は、留学生として来日した者、「技術」資格により日本企業で働く者、日中国際結婚により来日した者、中国帰国者、そして料理人として来日した「技能」資格を有する者である。本調査では第二世代の大学進学と非進学層の割合は半数程度であった。

3. 結果

中国系ニューカマー第二世代の若者は、日本語能力、日中間で異なる学校文化やコミュニケーションスタイルの違い、教師の無理解、親が「中国人であること」、そして「中国」に対する日本社会のステレオタイプを中心に義務教育段階で困難を抱えた経験があることを語った。こうした経験には、①学校が置かれた地域的文脈（外国出身生徒の多寡や受け入れの受容レベル）に加え、②世代差——日本生まれ／日本育ち（2世）、学齢期での中途来日（1.5世）が影響を与えていたと整理できる。

一方で、こうした困難経験を克服する手立てとして、中国系ニューカマー第二世代には「家族の教育戦略」が強く影響を与えていた。まず、親が「留学」や「技術」で来日し安定した家族を構える場合、親たちは日本の学校文化に抵抗するためのエスニックなメッセージ——「日本人と違った名前」をもつことの意味を「学業成績の高い中国人」とし、差異を肯定する情緒的な意味付与を第二世代に繰り返し与えていた。このため、こうした家族ではエスニック・アイデンティティや学習意欲が挫かれることなく、調査対象者の多くはメリトクラシー路線に適応して大学進学を達成していた。一方で、国際結婚家庭における連れ子や中国帰国者、また技能といった料理人の事例では、上記の事例とは対照的に親子関係は希薄化する傾向にあり、困難経験を親たちが相対化し、また子どもの学習意欲を繋ぎ止めるほど時間的・情動的資源を十分に持ち合わせていなかった。この場合、第二世代は学校における外国出身生徒とのネットワークを武器に居場所を獲得したり、日本人集団への同化や教師との親密な関係を手立てとすることによって学業達成を可能にしていた。他方で、こうした資源獲得に至らない場合、反学校文化集団を準拠としたり、労働に価値を置く親族集団を準拠とすることで学業達成が阻害されていた。

謝辞 本研究は科学研究費補助金基盤研究（B）26285193 の助成を受けたものである。